No.1170

昭和の万次郎

日米親善

江戸時代の末期、日本の漁師とアメリカの船乗りとの間に生まれた友情がその後4代135年間受けつがれ6月10日、アメリカのひ孫、ウイラード・ホイットフィールドご夫妻が日本を訪れました。日本のひ孫、中日病院外科医長、中浜博ご夫妻と固い握手。翌11日、ご夫妻は招待してくれた総理府へ植木総務長官を表敬訪問。
日本の漁師こと、ジョン万次郎は鳥島でアメリカの捕鯨船に助けられ、アメリカで教育を受け、後の安政7年日米修好通商条約の交換のため咸臨丸に通訳として乗りこんだ人。東京雑司ケ谷墓地にある万次郎の墓に献花。茶店で135年間続いた友情を再び確め合います。帝国ホテルで開かれた植木総務長官の招宴。日米親善の楽しい語らいが遅くまで続きました。

お多美さんの新聞

—千葉・館山—

ひとり静かにバラバラになった活字をもどしているのは滝口多美さん、通称お多美さん76才、紙面は小さいながら、地方新聞の編集長である。黒潮に洗われる房総のはずれ、小さな港町館山、この町に半世紀の歴史を持つ、お多美さんの新聞「ディリー房州」がある。「ディリー房州」は中央紙の通信記者だった、お多美さんの夫、滝口薫さんが病気で失明、退社したあと昭和6年に創刊された、現在崩れそうな社屋をささえているのは、お多美さんの他3人の社員、3人共復刊された昭和21年以来新聞作りをしてきた人たちだ。取材、編集をはじめ印刷から発送まですべて四人で手分けしてやる。発行部数は3千部、地方紙とは言え、すでに一万一千号を越している。夕方近く輪転機が動き出し、新聞の印刷が始まる4人の気持ちがいちばん充実する時だ。それぞれの想いを抱いて見つめる中、次々と刷り上がっていく。特にお多美さんは刷り立ての新聞を隅々まで一字一句かみしめるように読みかえす。
ディリー房州の歩ゆんだ道はきびしかった、戦争中は他紙に吸収され、戦後はストライキ、検閲とあらゆる苦難に相遇した。そして昭和37年、夫薫さんが世を去ると30人を越える人々がひとり、ふたりと去り、気が付いた時は4人になっていた。
しかしお多美さんは創刊以来の読者や残ったスタッフにささえられて頑張った。夫の意志を受け継ぐというより「ディリー房州」を自らの生活としてしまったお多美さん、館山の地で生き得る限り発刊し続けるだろう。